

肌色の測色とシーズン診断の関係について

Relation between skin color and personal color analysis

市場丈規 Takenori Ichiba Color Lab. for full Life 乾宏子 Hiroko Inui アトリエエクリュ
疋田千枝 Chie Hikita 吉田名保美 Naomi Yoshida 近藤ひろみ Hiromi Kondo 近藤恵未 Emi Kondo
(くらしの色彩研究会)

Keywords : 肌色測色, Skin Color Analyser, パーソナルカラー, シーズン診断, 測色用マスク

1. はじめに

1) パーソナルカラー診断においては、肌の色傾向が多かれ、少なかれ影響を与えていることが「COLOR ME BEAUTIFUL」「Color Me A Season」の訳著や国内のパーソナルカラーを推進してきた各協会のテキスト等から読み取れる。

2) 医学・化粧品分野、更には色彩情報処理分野では、肌色の測色に関する研究は数多く見られ、分光分布から肌色へのヘモグロビンとメラニンの影響量を独立変数として推定するものや、女性の肌色の地域や時代による変化を調査した論文・報告等が見られる。

3) 他方、肌の色とパーソナルカラー診断結果の関係を直接比較検討する研究は見られない。

4) 本研究では、肌の色とパーソナルカラー診断の関係について調査した。具体的にはNCSに基づく肌色40色票「Skin Color Analyzer」(Color Lab. for full Life製)を用いた肌色測色データとカラーアナリストがいうピンク系・オークル系の表現の整合性、4シーズン診断との関係について調査した。

2. 調査方法

1) カラーアナリストが診断時や授業・講座の際、生徒や参加者に専用調査用紙へ記入してもらおう方法でデータを収集した。

2) 調査用紙には①感覚でオークル系(黄みより)かピンク系(赤みより)かを記入。②NCSに基づく40色票「Skin Color Analyzer」を使用し、前腕内側と頬骨の下の2ヶ所を視感測色(図1)。③化粧状態を記入。④4シーズン診断結果(または自己申告)を記入させた。



図1. お互いの肌色測色をする様子

3) 照明条件は特定せず、通常パーソナルカラー診断を行っている環境で行ってもらった。

4) 視感測色用に用いた色票「Skin Color Analyzer」はs1010、s1515、s2020、s2030、s3020、s3030、s4020、s4030の8 Nuanceと-Y10R、-Y30R、-Y50R、-Y70R、-Y90Rの5 Hueを組み合わせた40色票からなり、色相が2つのどちらともつかない場合は中間の数値を記入させた。

3. 対象者の内訳

調査対象者総数は269人、調査地点は東京(45)、愛知(131)、大阪(63)、福岡(30)である。

調査対象者の感覚的肌色分類及び4シーズン診断分類の割合を図2、3に示す。(無回答を除く)

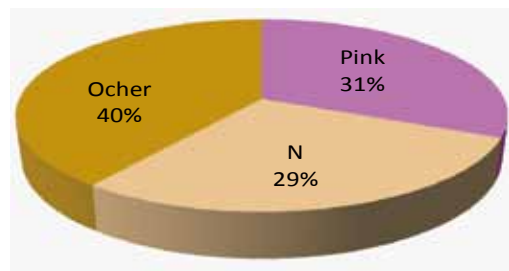


図2. 調査対象者の感覚的肌色分類

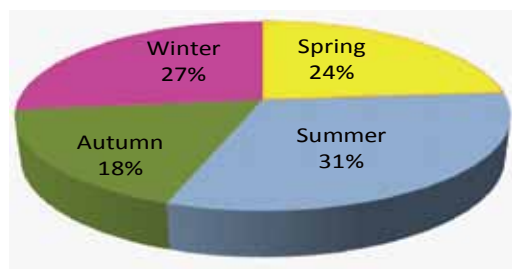


図3. 調査対象者の4シーズン分類

4. 測色結果

1) 前腕内側の測色値の平均値は、Hue: Y47R、whiteness: 64、頬骨の下のHue: Y52R、whiteness: 63で、前腕内側がやや黄みよりでわずかに白い傾向が見られた。Hue: 5、Whiteness: 1程度の差はあるが、化粧の影響等も考慮し、前腕内側の測色値を採用した。

2) 測色結果を感覚的肌色分類ごとに表1、2及び図4、5に、各シーズン診断ごとに表3、4及び図6、7にそれぞれの比率で示す。

5. 結論・考察

1) 表1、図4より、「ピンク系」「オークル系」という感覚的肌色評価と測色値の色相にはある程度の一致が見られた。しかし、「どちらとも言えない(N)」を加えると約半数がY50Rとみなされる狭い範囲に集中しており、この結果だけから色相による分離がされているとはいえない。表2、図5より白さには有意差はみられない。

2) 表3、4、図6、7より、4シーズンと肌色の関係においては、Spring、Autumnで相対的に黄みより肌が多いこと、Spring、Summerで相対的に色白肌が多い傾向が見られた。カラーアナリストによって一般論として言われている傾向に合致しているが、いずれも半数程度であり、単純な相関関係にはない。

3) 今回の測色により、肌の色傾向とシーズン診断についてどの程度の関係があるかが伺えた。

4) 測色時にマスクの使用の有無を130人の測色者で調べたところ、50%でマスクを使った方が白みが減少する傾向が見られた。測色値に色相及び色相と白みが変化したものを加えると86%で変化が見られた(図8)。記憶色に加え、色票の台紙色、面積効果の影響が測色に顕著に表れることを示している。

謝辞 今回の調査にあたり、日本色彩学会九州色彩ネットワーク様、パーソナルカラー研究会様、日本カラーコーディネーター協会様他多数の個人の方々から調査協力を頂いた。ここに記して感謝の意を表します。

表1. 感覚的肌色と色相比率(%)

Hue	Y10R	Y20R	Y30R	Y40R	Y50R	Y60R	Y70R	Y80R	Y90R
Pink	0.0	0.0	9.2	6.2	40.0	15.4	24.6	4.6	0.0
N	0.0	0.0	23.7	10.2	52.5	6.8	6.8	0.0	0.0
Ochre	1.2	2.5	43.2	16.0	32.1	2.5	2.5	0.0	0.0

表2. 感覚的肌色と白み量比率(%)

w	80	70	60	50	40
Pink	10.6	40.9	21.2	22.7	4.5
N	11.9	40.7	27.1	18.6	1.7
Ochre	15.0	30.0	27.5	18.8	8.8

表3. 4シーズンと肌色色相比率(%)

Hue	Y10R	Y20R	Y30R	Y40R	Y50R	Y60R	Y70R	Y80R	Y90R
Spring	0.0	4.1	34.7	10.2	30.6	6.1	12.2	2.0	0.0
Autumn	2.7	2.7	27.0	21.6	37.8	2.7	5.4	0.0	0.0
Summer	0.0	0.0	22.7	10.6	47.0	6.1	12.1	1.5	0.0
Winter	0.0	0.0	27.3	9.1	34.5	12.7	12.7	3.6	0.0

表4. 4シーズンと肌色白み量比率(%)

w	80	70	60	50	40
Spring	16.3	42.9	18.4	18.4	4.1
Autumn	5.4	32.4	24.3	29.7	8.1
Summer	21.2	30.3	25.8	19.7	3.0
Winter	10.9	30.9	27.3	23.6	7.3

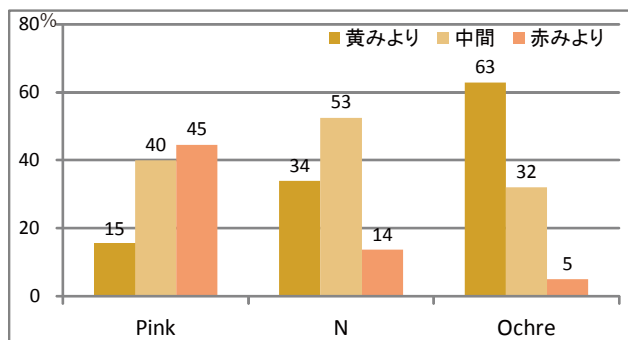


図4. 感覚的肌色と色相

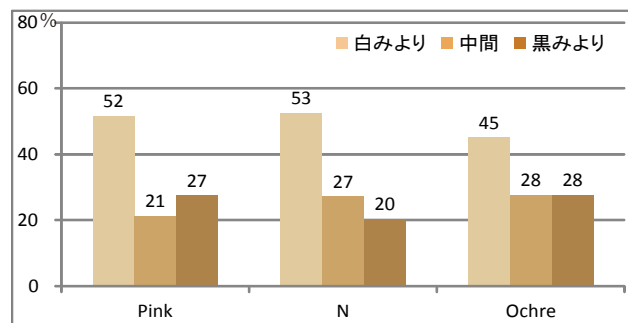


図5. 感覚的肌色と白み量

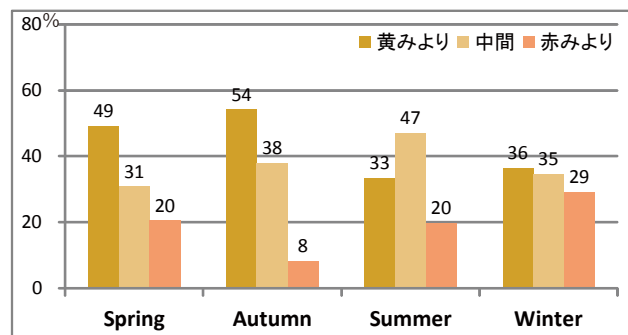


図6. 4シーズンと肌色色相

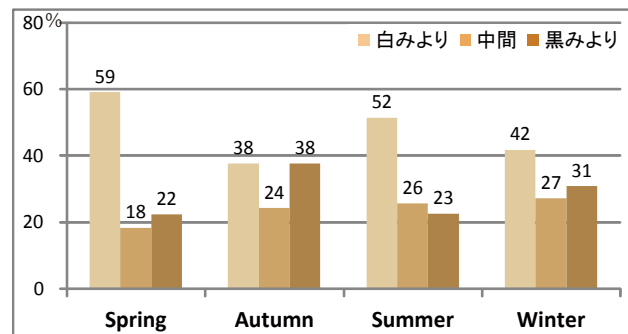


図7. 4シーズンと肌色白み量



図8. 測色時のマスクの有無による差